

大学図書館の存在意義



山梨大学附属図書館 医学分館長 キタムラ カズオ 喜多村 和郎

本年4月より医学分館長に就任いたしました。これから3年間よろしくお願いします。さて、私と大学図書館の関わりについて振り返ってみますと、学部生であった25年前は、教科書や専門書を閲覧してレポート作成や試験勉強をする場所でありました。大学院に進んで研究を始めてからは、実験の合間に新刊学術誌のコーナーに行き、冊子を取り最新の論文を片っ端からチェックしたり、過去の文献を探しに行ったりと、一日のほとんどの時間を研究室か図書館か生協のどれかで過ごすと言っても過言ではないほど、大学図書館は非常に身近な存在でした。それが、大学院を修了してしばらくしたあたりから、主要な学術雑誌がオンライン化されはじめ、研究室のPCから利用できるようになると、図書館へ足を運ぶ頻度は激減しました。ほとんどの雑誌とそのアーカイブが電子化され、洋書の専門書などもアマゾンなどで簡単に購入できるようになった現在では、会議などで図書館の建物に入ることはあっても利用者として立ち寄ることはなくなってしまいました。

このように、今の私にとって大学図書館は、その所在は知っていても普段は全く意識することのない空気のような存在となってしまう訳ですが、今回、医学分館長を拝命するにあたり、医学分館の現状とこれからのあり方について考えてみたいと思います。

1) 学びの場としての大学図書館

学生にとって、教科書や参考書を閲覧して自学自習ができるスペースを確保することは必要不可欠であり、医学分館は設立時からその役割を担ってきました。これは今後も変わることはありません。とは言え、医学分館の現状は私が学生だった頃の大学図書館とほぼ同じであり、施設の老朽化に加えて、様々な情報や媒体が電子化され、学生生活・学習環境も大



きく変化した現在においては時代遅れであるという感が否めません。2年ほど前に改修を終えた甲府キャンパスの本館は、十分な個別学習スペースはもちろんのこと、ラーニングコモンズと呼ばれる共有学習空間や、グループ学習室、サイレントエリア、視聴覚室、端末室など現代の大学図書館が備えるべき機能が充実しており、開放的な雰囲気の中で学生が自由かつ積極的に学習できる環境が整っています。本学と同時期に設立された医科

大学の多くにおいて附属図書館の改築・増築が進められていることを鑑みても、医学分館の改修は喫緊の課題であり、多様な学習環境の提供が急務であると感じています。



2) 情報資源の提供

言うまでもないことですが、ジャーナルの電子化によって図書館に直接足を運ぶことがなくなったといっても、ジャーナルの契約主体は大学図書館であり図書館を通さなければ利用できませんので、利用の仕方が変わったに過ぎません。また、近年では、教科書や参考書などの図書資料も全てではないですが、徐々に電子化されつつあります（本学で利用できる医学分野の電子ブックについては、www.lib.yamanashi.ac.jp/igaku/e-journalbook/e-books.htmlをご参照下さい）。また、論文データベース（Web of Scienceなど）や、



様々な医療情報データベースへのアクセスも可能となっています。さらにこれらの資料の一部は、「学認（学術認証フェデレーション）」によって学外からもアクセスすることができ、今後それらの資料も拡大していくことが望まれます。将来的には貴重な保存資料などの電子化も進むことにより、情報資源の提供という点では、大学図書館はますますヴァーチャルな存在となっていくことが予測されます。

限られた予算の中で、どのような情報をどういった形で提供するのが最良であるのかは、利用者の方々のご意見が大変貴重になります。図書館の提供する情報をぜひご活用くださり、問題点や改善点を図書館までお寄せ下さい。

3) 大学の顔としての大学図書館

大学図書館のもう一つの重要な存在意義は、大学の教育研究レベルはその大学図書館を見れば分かると言われるように、学問の府である大学の「顔」としての存在です。一例を挙げますと、私が研究員として留学していた英国のユニバーシティ・カレッジ・ロンドンは、メインキャンパスにある附属図書館が大学を代表する建造物で、大学のシンボルマークにもなっています（www.ucl.ac.uk/library/sites/main）。甲府キャンパスの本館は、大学の顔と呼ぶに相応しい設備と外観を備えた施設に生まれ変わったわけですが、医学分館も、国際的な視野を持ち地域医療に貢献できる医療人や世界に通用する医学研究者の養成を目標に掲げる医学部の理念を象徴する施設としてあり続けるために、時代とともに常に発展・進化し続けていくことが必要であると考えています。